

水道局第3投棄場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

丸山窯跡

平成8年度

1997. 3

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター
香 川 県 水 道 局

例 言

1. 本書は、水道局第3投赛场整備工事に伴い平成8年度に実施した丸山窯跡（まるやまかまあと）の発掘調査の概要を記録したものである。
2. 本調査は、香川県教育委員会文化行政課が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 本年度の調査組織は、次のとおりである。

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総 括	所 長	大森 忠彦
	次 長	小野 善範
総 務	参 事	別枝 義昭
	係 長	前田 和也
	主任主事	西川 大
調 査	参 事	近藤 和史
	主任文化財専門員	大山 真充
	文化財専門員	西村 尋文
	文化財専門員	山元 素子
	主任技師	山田 秀樹
	調査技術員	糸山 晋

4. 調査にあたっては、次の機関や方々に協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略）
香川県営水道管理事務所，地元各自治会，地元各水利組合，元好英智。
5. 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。
SF：窯 SX：性格不明遺構
6. 挿図の一部に国土地理院地形図(1/25,000)を使用した。
7. 本書で使用している国土座標系は第IV系であり，方位はT.N.を指すものが真北，それ以外のは国土座標系による北をあらわす。
8. 本書の執筆，浄書は調査担当者が分担し，編集は山元が行った。

本文目次

I 調査の経緯と経過	1
II 遺跡の概要	1
1. 立地と環境	1
2. 調査の成果と概要	2
3. まとめ	12

挿図目次

第1図 調査位置図	1
第2図 周辺遺跡図	2
第3図 遺構配置図	3~4
第4図 I区SF01平・断面図	7
第5図 I区SX01平・断面図	8
第6図 丸山窯跡出土軒平瓦	9
第7図 丸山窯跡出土軒平瓦・軒丸瓦	11

表目次

表1 軒平瓦・軒丸瓦出土遺構一覧	13
------------------	----

写真目次

写真1 調査地全景(草刈り後)	5
写真2 I区瓦集中部分	5
写真3 II区全景	6
写真4 I区SF01完掘状況	6
写真5 I区SX01瓦出土状況	7

I. 調査の経緯と経過

県営水道管理事務所が第3投棄場造成を計画したに伴い、試掘調査が香川県教育委員会文化行政課によって平成4年7月20日～7月23日に実施された。調査は造成地のうち周知の埋蔵文化財包蔵地として窯跡2基が認められていた北東部斜面とその下の谷部分について行われた。その結果瓦窯跡2基と灰原1基を確認した。そのうち瓦窯2基については検出場所から考えて周知の埋蔵文化財包蔵地である丸山西2号窯、丸山西5号窯であると思われる。そのため、事業主体である県営水道管理事務所と協議が行われ、発掘調査を行うことになった。また、谷部分でボックスカルバート部分の造成を急ぐためその部分だけ先行して文化行政課で発掘調査を行うことになり、平成4年12月7日～12月18日まで調査が行われた。その結果瓦溜遺構が1基検出された。

発掘調査は財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが香川県教育委員会より受託した。調査期間は平成8年7月～9月、調査面積は1,076㎡である。

発掘調査は直営方式で実施し、平成8年7月1日より開始し、9月30日に終了した。なお、調査期間中北東斜面の一部が崩壊したため復旧工事も併せて実施した。

II. 遺跡の概要

1. 立地と環境

丸山窯跡は、香川県のほぼ中央部にある綾歌郡綾南町陶を中心として、一部坂出市にもまたがる十瓶山窯跡群の一部をなす。これらは南部を鞍掛山をその西端とする千疋丘陵、北部を鷲ノ山・十瓶山・火ノ山・柳頭山の諸山地、西部を長吾山・横山、東部を本津川低地に囲まれた標高40メートルから50メートルの洪積台地である滝宮台地上にそのほとんどが展開しており、現在では80基以上の須恵器窯跡と20基以上の瓦窯跡が確認されている。今回調査の対象となった丸山窯跡に近いものでは、西部に内間窯跡群、東部にますえ畑窯跡群があり、それぞれ瓦窯跡として知られている。こういった大規模な古代窯業

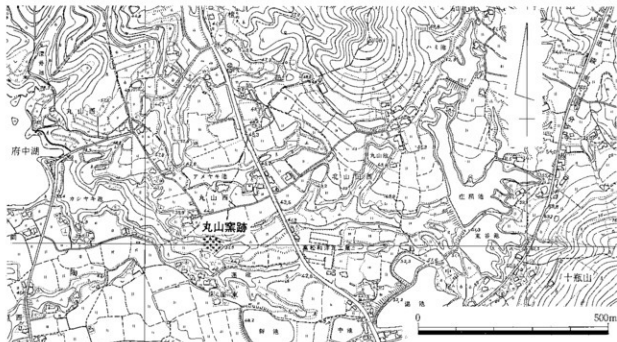
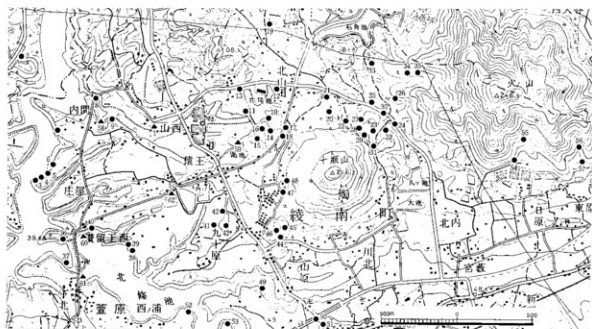


図1 調査位置図 (1/10,000)

の成立には原材料の粘土、燃料の薪、窯の構築にとって好適な斜面地形の存在等が不可欠であり、さらに原料・燃料・製品の搬出入のための交通の利便性およびそのための労働力に加え、大消費地としての官衙、集落等をひかえた流通圏、そして権力者の庇護などが必要であるとされている。その点十瓶山窯跡群の立地する地域、とくにその西部は奈良時代には坂出市府中にあった讃岐国府に近く、綾川の水運によって国府と直結しており、優れた地理的位置と交通利便性を備えていたといえる。また、原材料である窯業用粘土については、粘着性・可塑性の強い土壌が地表近くに豊富に包蔵されており、地形的にも各台地末端の急崖は窯の構築に格好な斜面を提供している。また、当時は台地上位は水利上不便であったことから水田化が遅れ、森林がかなり残存していたと思われる、窯業生産のための豊富な燃料を供給していたと考えられている。以上の諸点から滝宮台地を中心とする地域は、窯業生産に好適な条件をかなりの面で備えていたと考えられる。

2. 調査の成果と概要

調査地は県道綾南国分寺線の西端部分の南側の谷筋で、現在県営水道第3汚泥投棄場として使用されている箇所のはほぼ東北隅にあたる。調査対象地はその斜面部分およびその下の谷の部分で、対象面積は



1 丸山窯跡	17 大塚池1号窯	33 かの焼谷1号窯	49 定楽窯
2 打越窯	18 大塚池2号窯	34 かの焼谷2号窯	50 西村1号窯
3 庄屋原1号窯	19 奥下池南窯	35 かの焼谷3号窯	51 西村2号窯
4 庄屋原2号窯	20 北山田1号窯	36 池宮神社南窯	52 田畑窯
5 庄屋原3号窯	21 北山田2号窯	37 霊原下2号窯	53 陶畑窯
6 庄屋原4号窯	22 十瓶山北麓窯	38 北条池1号窯	54 赤瀬山1号窯
7 庄屋原5号窯	23 すべつと1号窯	39 北条池2号窯	55 赤瀬山2号窯
8 田村神社東窯	24 すべつと2号窯	40 北条池4号窯	56 杵ノ谷1号窯
9 明神谷窯	25 すべつと3号窯	41 九十瓶新池1号窯	57 杵ノ谷2号窯
10 庄屋池1号窯	26 すべつと4号窯	42 九十瓶新池2号窯	58 内開瓦窯
11 庄屋池2号窯	27 すべつと5号窯	43 九十瓶新池3号窯	59 ますえ窪瓦窯
12 片屋池3号窯	28 すべつと6号窯	44 山の upper 1号窯	60 北条池瓦窯
13 片屋池4号窯	29 すべつと7号窯	45 山の upper 2号窯	61 西の浦瓦窯
14 東谷池1号窯	30 すべつと8号窯	46 山の upper 3号窯	62 小坂池瓦窯
15 東谷池2号窯	31 すべつと9号窯	47 十瓶山西1号窯	●—窯跡
16 東谷池3号窯	32 すべつと10号窯	48 十瓶山西2号窯	▲—瓦窯跡

図2 周辺遺跡図(1/25,000)

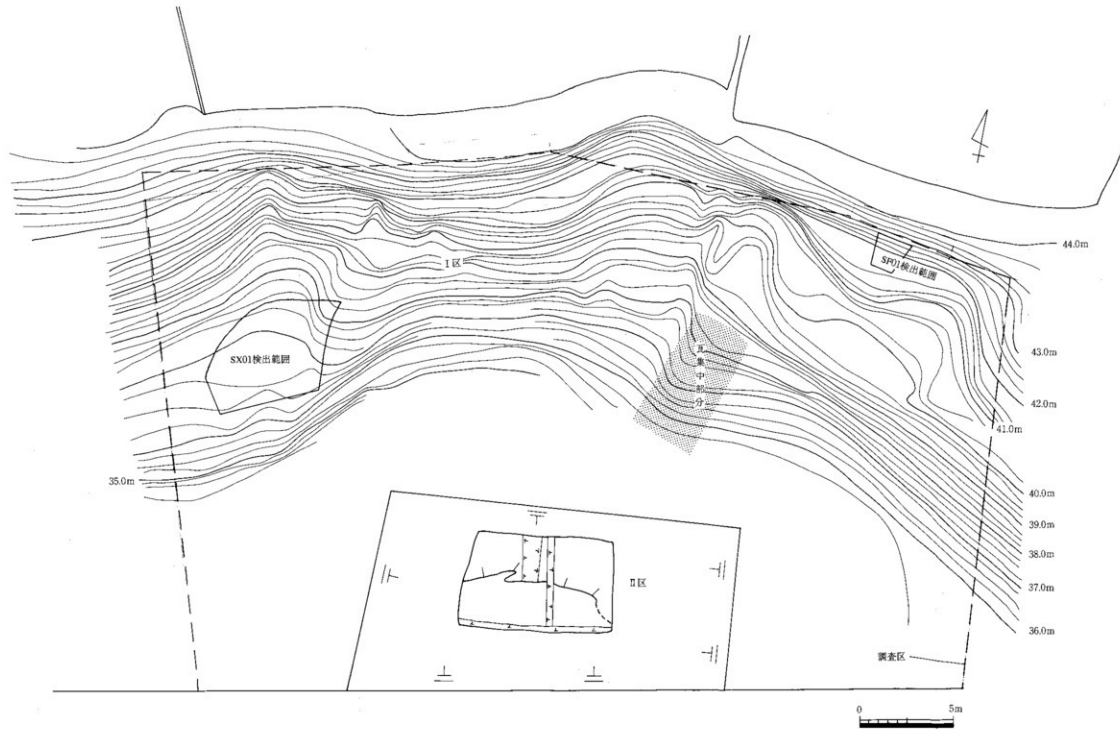


図3 遺構配置図(1/200)

1,076㎡である。今回調査を行った調査地の南側約430㎡は平成4年度に文化行政課による調査が行われ、東西7m以上、南北20m以上、深さ0.5mで不正楕円形を呈する瓦溜遺構が検出されている。

北側の斜面部分では、最近のものと思われる産業廃棄物や客土が深さ約1.7mにわたって大量に堆積していた。それらを重機で除去したが、谷部分では遺構面が残っていた部分もあったものの、尾根部分では遺構面はおおむね削平され遺存していなかった。調査区は北側の斜面部分をⅠ区、南側の谷部分をⅡ区とした。

Ⅰ区の調査

今回の調査ではⅠ区のほぼ東北端で瓦窯1基を検出した。瓦窯はロストル構造を持つ窯である。焼成室の一部と隔壁、それに続く燃焼室の一部を検出した。焼成室の上部から上については用地外へ延びる。また焼成室の下側70cmより下部は後世の削平を受けていた。焼成室には瓦が残されていた。なお、「香川県埋蔵文化財包蔵地調査カード 綾南町」(県教委)にはこの窯の西側約20mに1基瓦窯の記載があるが、今回の調査では窯は存在しないことが確認された。この部分には焼上がほぼ一面に認められたものの、焼土の拡がり不鮮明で焼土部分にトレンチを掘削して確認したところ、ブロック状の焼土が厚さ約1cmほどで拡がり、その上下には客土の堆積が認められた。従ってこの焼土も客土として運ばれてきたものであり、それを窯と誤認したものとおもわれる。

Ⅰ区の西端の斜面では溝状遺構を検出している。この溝状遺構は斜面の小さい谷筋を縫って検出しており、下層には炭の堆積が見られた。埋土からは瓦がコンテナ6箱出土した。この溝の斜面の上部には灰原が想定され、おそらく灰原の一部が斜面の谷筋を縫って谷へ落ちたものであろう。

Ⅰ区の中央付近では明確な遺構としては捉えられなかったものの、SF01の西約20mの谷部分付近で瓦の集中個所が認められた。これらは斜面の谷筋の傾斜の緩くなっている個所にみられ、この上部の瓦窯の灰原から流出したものと考えられるかもしれない。

その他客土中からも瓦がコンテナ16箱分出土した。これらは磨滅もあまり受けていない。同じ層位中からは空き缶やビニールなど明らかに現代のものが混在しており、他所から搬入されたことは確実である。これらはあるいは他所の瓦を包含する土をこの場所へ投棄したのかもかもしれない。

Ⅱ区の調査

Ⅱ区はⅠ区の斜面と平成4年度に文化行政課が調査を行った部分(約430㎡)の間が対象であった。この部分については既に管が設置され、それを覆うように厚さ約2mにわたって水道汚泥が投棄されていたため、安全勾配を確保するため管を除去しながら、上面で幅約10m、下面で幅約5mで掘削を行い、



写真1 調査地全景(草刈り後)



写真2 Ⅰ区瓦集中部分

遺構が検出されればその部分だけ広げる方法を探った。この部分では文化行政課が調査した際に検出した瓦溜遺構の続きが検出されることが予想されたが、今回の調査で検出することはできなかった。

Ⅱ区ではほぼ西半分で厚さ約3cmの灰色包含層が堆積していたが、遺物量は少なかった。北端では溝が山の斜面に沿って幅約2m検出された。溝の北側の肩については調査の安全を考え検出はしていない。深さ60cmで埋土中からはローリングを受けた瓦片が数点出土した。Ⅱ区では前述の溝以外特に遺構も認められず、遺物もⅠ区に比べて量も少なく磨滅しているものが多かった。溝の上面に堆積していた客土中からは単弁八葉蓮華文軒丸瓦が1点出土している。これと同文の瓦は平成4年度に文化行政課が行った調査でも客土中から出土しており、滝宮天満宮境内の龍燈院跡から出土しているものと同文である。



写真3 Ⅱ区全景

S F01 (丸山西5号窯)

調査区の東北隅で検出した。検出したのは焼成室1.3mと隔壁、燃焼室0.7mである。焼成室の大部分と焚口は後世の削平により消滅し、焼成室の上部は用地外へ延びる。ロストル構造を持つ平窯と考えられる。補修等の痕跡は認められなかった。

燃焼室は隔壁付近で幅約1.3m、床面は深さ約5cmで皿状にくぼみ、炭が一面に堆積していた。隔壁は高さは91.4cmで、スサ入りの粘土を用いている。隔壁の表面は還元状態で固く焼け締まり、層厚0.5cm程度であった。

焼成室は幅約1.5mで検出した範囲では幅は変わらない。2条の分焰壁を持つ。分焰壁の幅は25cm、焰道からの高さは燃焼室寄りで5~6cm、北端用地境で2~5cmと低く、上部へいくほどその差は少なくなる。側壁は残存する範囲ではほぼ垂直に立ち上がるが、高さ約25cmしか残存せず、それより上部は削平されていた。分焰壁、焰道とも地山を削りだしたもので表面約10cmは堅く焼け締まり、その下部は赤色酸化層であった。しかし、表面は傷みが激しく、ブロック状に割れていた。

S F01からは3種類の七連巴文軒平瓦、1種類の五連巴文軒平瓦、左巻きの巴文軒丸瓦の他丸瓦、平瓦がコンテナ4箱出土した。

S X01

調査区の西北隅で検出した溝状の遺構である。幅90cm、深さ95cmで斜面の谷筋に沿うように走り、西側の用地外へ延びる。おそらく用地の北側に存在していた（現在は消滅）瓦窯の灰原が斜面の緩いところに形成され、それが谷筋に沿って流出したものをS X01として検出したものと思われる。

S X01からは連巴文軒平瓦9種類、唐草文軒平瓦2種類、巴文軒丸瓦2種類、蓮華文軒丸瓦2種類をはじめとして平瓦、丸瓦等瓦がコンテナ6箱出土した。出土した軒平瓦、軒丸瓦の瓦当文様に時期幅が若干あること、S X01に炭の層が2箇所あることを考え併せると複数の操業または複数の窯からの流出が考えられる



写真4 Ⅰ区S F01完掘状況

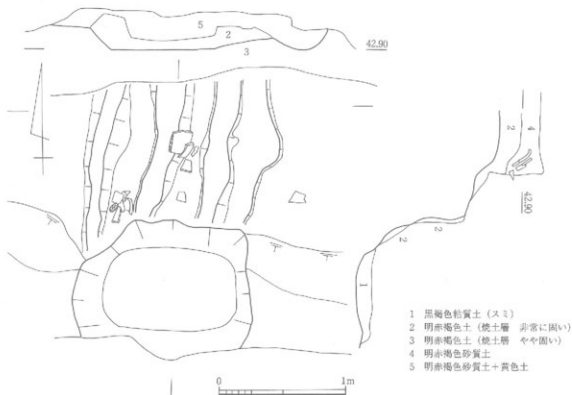


図4 I区SF01平・断面図(1/30)

かもしれない。

遺物

軒平瓦

軒平瓦は大半が巴文を5個ないし7個連ねた連巴文である。連巴文軒平瓦のほとんどは須恵質であるが土師質のものも含まれる。范型は確認できたもので七連巴文4種類、五連巴文5種類であるが、いずれの范型にも該当しないものもあり、他にも数種類の范型があると考えられる。製作技法はいずれも瓦当面の上面と下面に1~6cm程度へら削りを施し、平額であるが、平瓦との接合粘土が少なく瓦当面の上面または下面で瓦当と平瓦の境が斜めになるもの、また下面のへら削りを2段に施して段状にするものもあった。しかし范型による製作技法の差異は認められなかった。出土地や焼成と范型、製作技法などの相関関係については今後の課題としたい。その他唐草文軒平瓦が4種類6点出土した。

七連巴文軒平瓦(1)(2)(図6) 内区を左巻きの七連巴文で飾る。SF01, SX01, 瓦集中部分, 客土中などで合わせて53点が出土している。(1)と(2)の文様はほとんど同じであり識別は難しいが、わずかに巴文の巻き方が違う。この遺跡ではこの2種類を合わせると出土軒平瓦の40%近くを占める。同文と思われる瓦は平安宮内裏、六波羅密寺など京都で出土している。

七連巴文軒平瓦(3)(図6) 内区を七連巴文で飾



写真5 I区SX01瓦出土状況

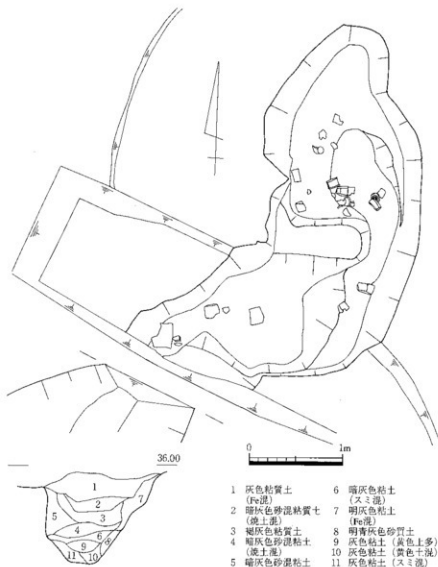


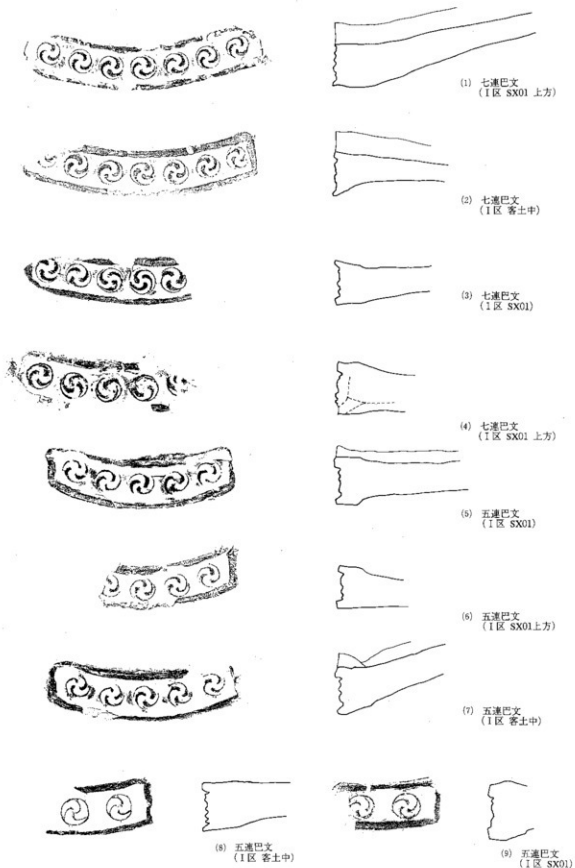
図5 I区 SX01平・断面図(1/40)

るが、左から3つめと4つめの巴文が右巻きで、他の巴文と逆巻きになる。SF01, SX01で確認されているほか、瓦集中部分や客土中でも確認されている。

七連巴文軒平瓦(4)(図6) 他の三種類のものと同様のものが、左端の巴文のみ左巻きで、残りの巴文はすべて右巻きである。この種類の瓦は七連巴文の中では数が少なく、SX01およびその上方で3点、客土中で数点出土しているのみである。出土したものはすべて須恵質であった。

五連巴文軒平瓦(5)(6)(7)(図6) 内区を五連巴文で飾る。(5)~(7)はよく似ており判別が難しいが、巴文の巻き方と使用中にできたと思われる范傷の差から3種類に分けた。あわせて25点でSX01などから出土している。また范型は異なるもののこれらの文様に酷似した五連巴文軒平瓦がSF01から1点出土した。

五連巴文軒平瓦(8)(9)(図6) 内区を五連巴文で飾る。他の連巴文に比べて彫りが深く、巴には圈線が巡り、巴の尾は圈線に繋がる。巴の頭も互いに接する。全般に瓦当面に対して范型が小さいようで、范端痕跡が明瞭に観察できるものも多い。SF01からの出土はなく、SX01その他から合わせて30



0 10cm

图6 丸山窯跡出土軒平瓦(1/4)

点出土する。鳥羽離宮で同文と思われる瓦が出土する。

唐草文軒平瓦 (12) (図7) 二つ巴に似た唐草文である。左1/4ほどの破片である。Ⅱ区客土中から出土した。須恵質で残存部分では瓦当面の上面にはへら削りを施さず全面に布目を残す。下面も幅1cmほどへら削りを施すのみで、そのへら削りも左端面までは及ばない。瓦当面が范型より小さかったようで瓦当面の左端で文様が途切れている。同文と思われる瓦は平安京左京五条三坊、平安宮内裏、鳥羽南殿で出土している。

唐草文軒平瓦 (13) (図7) 小破片でSX01から出土した。須恵質で出土した範囲では内区に左巻きの唐草文を配し、外区にも唐草文をまばらに配する。小破片のため瓦の調整等は明らかではないが瓦当の下面は少なくとも5cmの幅でへら削りが施されている。

均整唐草文軒平瓦 (11) (図7) 中心飾りより左右に唐草が2反転する。外区及び脇区にも唐草を配する。SX01およびその上方から2点、Ⅱ区の客土中から1点出土している。3点出土したうち1点が須恵質、2点が土師質である。調整方法は、いずれも瓦当面上面は1cm程度面取りするようにへら削りを施し、下面はへら削りは施さない。平安京左京二条二坊(高陽院)で同文と考えられる瓦が出土している。

均整唐草文軒平瓦 (14) (図7) 瓦当の右側のみであるが、おそらく退化した半截花文または樹状の中心飾りを持つと考えられる。須恵質で平瓦と瓦当の境は段をなさない。上面、下面とも約5cmの幅でへら削りを施している。Ⅰ区客土中から1点出土した。

軒丸瓦

巴文軒丸瓦 (15) (16) (図7) 右巻きと左巻きがある。巴の頭が接するものと離れるもの、巴の尾が接するものと離れるものがあり、それぞれに数種類の范型があるようだが、完形品はわずかで破片が多いので同范の確認は難しい。珠文を伴うものはない。右巻きの巴文はSX01、瓦集中部分、客土中からなど35点、左巻き巴文はSF01、SX01などから19点出土している。瓦当厚は0.6cm~1.5cm程度であるが、概ね1cm前後である。焼成は須恵質のものが多く、土師質のものも含まれる。瓦当裏面はほとんどはなで調整であるが、縄目痕を残すものもある。讃岐産巴文軒丸瓦は京都でも類例が多いが、今回の調査で出土した瓦と同范品が京都へ搬入されているかどうかは今後の課題としたい。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (17) (図7) SX01から1点出土した。中房は突出し、花卉状を呈する。蓮子の数は1+8である。複弁で間弁は撥型、外区には左回りに反転する唐草文を配する。土師質で焼成が悪く、調整は不明である。平安京左京二条二坊(高陽院)で同文と思われる瓦が出土している。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (18) (図7) SX01から小破片で出土した。中房部分は大半が欠けているが、弁の部分、外区の唐草文とも複弁八弁蓮華文(17)の踏み返しのように文様が同じで凹凸が逆である。須恵質で裏面はなで調整を施している。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦 (19) (図7) Ⅱ区客土中から小破片で出土した。中房部分は欠損する。外区は二重圏線を巡らせる。弁の中央には鑊状に突線が入り、弁は通常の弁とは逆に盛り上がりずらに窪む。土師質である。瓦当裏面は剥離していて調整は不明である。香川県東壺燈跡から同文と思われる瓦が出土している。

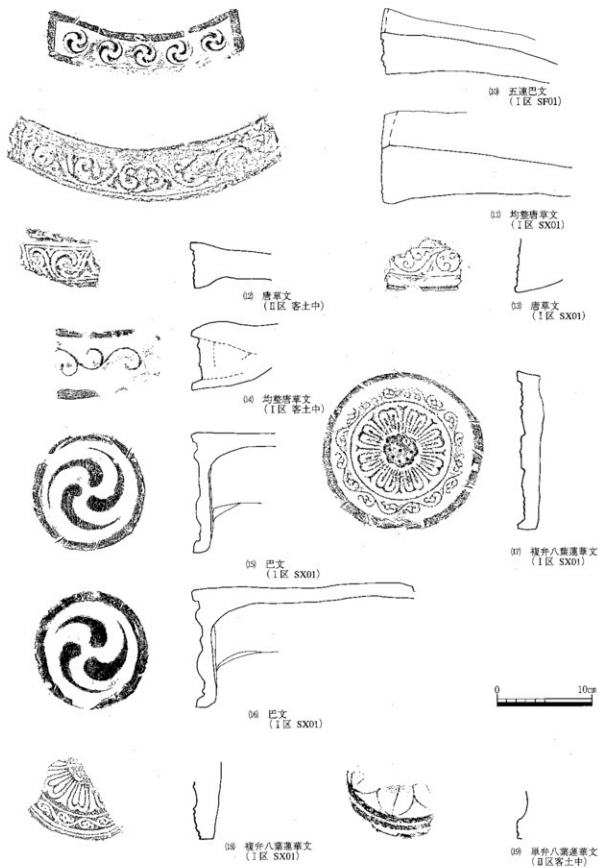


图7 丸山窯跡出土軒平瓦・軒丸瓦 (1/4)

3.まとめ

今回の調査では窯跡1基、瓦溜遺構1基を検出した。SF01は後世の削平を受けたり、一部用地外へ延びるなど部分的な調査しか行えなかったが、十瓶山窯跡群の瓦窯の資料はますえ畑瓦窯、西村1・2号窯など調査例も少なく、新しい資料を提供したといえよう。丸山西5号窯(SF01)は西村1・2号窯が瓦陶兼業窯であるのに対し、ますえ畑瓦窯と同様瓦専業窯である。西村1号窯は12世紀初頭頃、ますえ畑瓦窯は12世紀前半頃に比定されている。また丸山西5号窯では少なくとも3種類の范型の七連巴文軒平瓦、1種類の五連巴文軒平瓦と1種類の左巻き巴文軒丸瓦を焼成したことがわかり、12世紀後半頃操業であることが明らかになった。SX01からは11世紀後半から12世紀後半と出土する瓦に時期幅があり、良好な資料とはなり得ないかもしれないが、客土中とは異なり斜面の上部から流出していることが考えられるため、いずれもこの付近で焼成されたものと考えられよう。この中にはSF01と同范の瓦も含まれており、范型の移動または同一工房で製造された瓦が複数の窯で焼成されていたと考えられる。今後は瓦当の詳細な検討を行い、范型の移動があったかどうかなどを検討したい。

今回出土した瓦には遺構内、遺構外を含めて平安宮、平安京、鳥羽離宮、寺院など京都で出土している瓦と同文と思われる瓦も確認されており、その中にはおそらく同范の瓦が多数含まれていると思われる。どこへ搬入され、どこで使用されたかを確認することが今後の課題であろう。また県内でも西村遺跡や龍燈院跡など同范の可能性のある瓦が出土している。県内での供給先の確認も併せて今後の課題としたい。

軒平瓦

	SF01	SX01	SX01(上方)	I区I区中部分	I区客土中	II区客土中	総数	備考
七連巴文(1)	3	2	3	3	15		26	法住寺殿 六波羅密寺 平安宮内裏
七連巴文(2)	4	3	3	3	13	1	27	
七連巴文(3)	3	4	1	6	4	2	20	
七連巴文(4)		1	2		3		6	
五連巴文(5)		1	6				7	法住寺殿 平安京二条入路 西村遺跡
五連巴文(6)		2	4		1		7	
五連巴文(7)		9			2		11	
五連巴文(8)		3	7	4	10		24	鳥羽離宮 法住寺殿
五連巴文(9)		1	3		1	1	6	
均整唐草文(11)		1	1			1	3	平安京左京二条二坊
唐草文(12)						1	1	平安京左京五条三坊 平安宮内裏 鳥羽南殿
唐草文(13)		1					1	
均整唐草文(14)					1		1	
合計	10	19	39	16	50	6	140	

軒丸瓦

	SF01	SX01	SX01(上方)	I区I区中部分	I区客土中	II区客土中	総数	備考
巴文(右巻き)(15)		6	5	18	2	4	35	
巴文(左巻き)(16)	2	2		12	1	2	19	
連華文(17)		1					1	平安京左京二条二坊
連華文(18)		1					1	
連華文(19)						1	1	龍燈院
合計	2	10	5	30	3	7	57	

※ ○ 内の番号は図6・7の番号と同じ

表1 軒平瓦・軒丸瓦出土遺構一覧

報告書抄録

ふりがな	すいどうきょくだい3とうきじょうせいびこうじにともなうまいぞうふんかざいはくつちょうさがいほう						
書名	水道局第3投棄場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番							
編著者名	山元素子 山田秀樹						
編集機関	財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒762 香川県坂出市府中町南谷5001-4 TEL0877-48-2191						
発行機関	香川県教育委員会・勲香川県埋蔵文化財調査センター・香川県水道局						
発行年月日	平成9年3月31日						
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数
16頁	3頁	13頁	0頁	0頁	5枚	7枚	0枚
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町 遺跡		遺跡	調査期間	調査 面積	調査原因
まるやまかまあと 丸山窯跡	かがわけんりょうなんちょうあざうちまちない 香川県綾南町字内間地内	37382		33°0'05' 133°30'05'	7月1日 ～ 9月30日	1076㎡	水道局第 3投棄場 整備工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
丸山窯跡	窯跡	平安時代後期	窯・瓦溜遺構	瓦			

水道局第3投棄場整備工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報
丸山窯跡

平成8年度

平成9年3月31日

編 集 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
〒762香川県坂出市府中町南谷5001-4
電話 0877-48-2191

発 行 香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
香川県水道局

印 刷 タナカ印刷株式会社